

松任谷正隆の

僕のひとりごと

16

VOL.16 マンション暮らし…の続き

前回、マンション暮らしの話をした。

マンションでの暮らしは、印象深くもあり、葬り捨てたくもあり、とても複雑なのだが、いくつか思いだしたことがあるのでもう1回だけしようか、と思う。

僕はこのマンションに越して、クルマを300万円のAUDIから700万円のベンツにした。

まあ、自分としては清水ジャンプではあったわけだが、多少稼げるようになったって事でもある。

マンションは青梅街道沿いの11階。駐車場はなく、仕方なしに僕は青梅街道を挟んで向かいの月極駐車場を借りていた。当時月極と言えば、平置き駐車場である。

幸いなことにダイニングキッチンが青梅街道に面していたこともあって、クルマはよく見えた。

ちなみに僕の借りていたスペースの両隣は左側が一般の人、

右側が隣接した小さな不動産屋が借りているスペースだった。

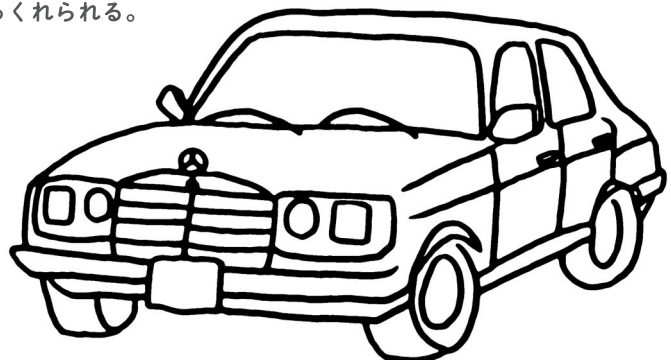
上から見ていると、その不動産屋の白いワゴンがよろよろと僕のクルマにぶつかりそうになりながらバックをされていて、いつも不安でならなかった。

そしてついある朝、僕が自分のクルマのところに行ってボディカバーをめくるとボコンと大きな凹みが…。もちろん右側である。

若かったせいもあるが、頭に血が上った僕はその足で不動産屋の扉を勢いよく開け、

開口一番、僕のクルマにぶつけたのは誰だ！なんて言うわけである。

そしてご想像の通り、何のこと？という具合にしらばっくれられる。



防犯カメラなんて洒落たものなどどこにもないから、もうそれで終わり。

あのプレハブの安普請な不動産屋のインテリアは今でもはっきりと目に焼き付いている。

もう少しインテリアに気を遣ってれば、僕もこいつらのせい、と決めつけてはいなかったかもしれない。

さて、ほとんどリビングの体をなしていなかった

我が家のマンションのリビング。

それでも何人かの印象深い客を迎えた。

ひとは僕のクルマの「練馬ナンバー」を笑った某女優。

練馬ナンバーはカッコ悪いことなのか？

もちろんこの女優はその後出入り禁止にした。

それから、僕のプロキャリアスタートとも言える、

1年間一緒に仕事をした小坂忠さん。

喧嘩別れに近い別れかたをしたにもかかわらず、

訪ねてくれたことは内心本当に嬉しかった。

やっぱり敵は一人でも少ない方がいいし、

味方は一人でも多い方がいい。

忠さんと、マネージャーのようなプロデューサーのような存在

でもあった奥さんが並んで座っているブルーのソファを見ていたら、

一緒に仕事をしていた1年間のことが走馬燈のように蘇ってきた。



そうだ、今回はこの人とバンドをやっていた1年間、

住むでもなく住まないでもなく暮らしていた狭山の家のことを書こう。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。